

Jean Tardieu (1903-1995)

経歴

1903年11月1日、ローヌ・アルプ地方アン県サン＝ジェルマン・ド・ジュで、画家の父とハープ奏者の母との間に生まれる。パリのコンドルセ高校を経て、パリ大学で文学と法律を学ぶ。高校の同級生には、アルベール・マリ・シュミット^{*1}やランザ・デル・ヴァスト^{*2}がいた。1923年に、友人のジャック・ウルゴン^{*3}の紹介で、ポール・デジャルダンの主催するポンティニー旬日懇話会（現在のスリジー国際会議の前身）に参加するようになる。この懇話会で多くの作家（ヴァレリー、リヴィエール、マルロー、モーロワ、クルティウスなど）と交流する。とりわけアンドレ・ジッドに一目置かれ、1927年に『新フランス評論』誌で最初の作品を発表することになる。また、ベルナール・グレティゼン^{*4}とも親しくなり、カントやヘーゲル、ニーチェ、ゲーテ、ヘルダーリンなどを読むようになる。1931年にはヘルダーリンの『多島海』の翻訳も行った。この翻訳は、原文の6歩格（ヘクサメトロス）をフランス語の長音アクセントではなく、強さアクセントで再現しており、ブランショに「見事な翻訳」と評価された。



Jean Tardieu

1932年にマリー＝ロール・プロと結婚。この頃、ポンジュとも知り合い、親交を深める。1933年、小詩集『隠れた河』（*Le fleuve caché*）を発表し、シュペルヴィエルから「我々から逃れ去るもののすべてを描けている」と評される。1939年に『アクセント』（*Accents*）、1943年に『見えない目撃者』（*Le témoin invisible*）を発表。この時期からドイツ占領下時代を迎えるが、タルデューは、ダニエル・トレヴー（Daniel Trévous）、ダニエル・テレザン（Daniel Thérézin）の偽名で作品を地下出版していた。これらの作品の一部は、後にエリュアールが編纂した『詩人たちの栄誉』（1943年）や、雑誌『ヨーロッパ』（1944年）などで取り上げられている。この時期に、カミュやギュヴィック、フォラン、アラゴンらとも出会う。「オラドゥール」も地下出版時代の『レ・レットル・フランセーズ』で発表されている（1944年）。

第二次世界大戦後は、ラジオ局に務め、ピエール・シェフェールの「実験スタジオ」（Studio d'essai）で、多くのラジオドラマや音楽番組を手がける。この頃になると、クノーの実験文学やイオネスコ、ベケットの不条理演劇の影響も加わってくる。1951年の『ムッシュー・ムッシュー』（*Monsieur Monsieur*）は、不条理とユーモアに満ちた詩集で、ブルトンにも賞賛された。劇作品と詩作品を必ずしも別の仕事と割り切ることはせず、『人間なき声』（*Une voix sans personne*, 1954）や『日の闇』（*L'obscurité du jour*, 1974）などでは、戯曲・詩・エッセー・対話といった複数の形式を一つの書き物として発表するスタイルをとっている。画家との交流も盛んで、ピカソ、エルンスト、ハルトゥング、アルシンスキーらと協力して多くの詩画集を発表した。1995年1月27日、クレティユにて没。

タルデューの詩法

タルデューの詩に多く見られる言語遊戯やユーモア、形式への挑戦は、必ずしも楽観的なものではなく、自己の実存的不安や恐怖といった感情と切り離すことができない。ジャン・オニミュスによれば、こうした作風はタルデューが青年期に、鏡に映る自分が別人に見えるという「危機」を経験し（解離性障害に近い？）、重度の抑鬱状態に陥った

*1. 文学者（1901-1966）。ウリボ創始時メンバーの一人。訳書に『象徴主義—マラルメからシュールレアリスムまで』（白水社）

*2. 哲学者・詩人（1901-1981）。ガンジーの弟子で訳書に『反暴力の手法』（新泉社）

*3. ラテン文学者（1903-1995）。デジャルダンの娘と結婚し、婿になる。娘のエディット・ウルゴンはスリジー国際会議の後継者。

*4. ドイツ系フランス人哲学者（1880-1946）ガリマール出版のドイツ文学書籍の顧問としてフランスにドイツ文学（カフカやヘルダーリンなど）を紹介。訳書に『ブルジョア精神の起源』（法政大学出版）他。

こととも深く関係しているという*5。事実、タルデューの作品には「分身」や「影」、「二重」といった主題が多く見受けられる。

また、タルデューの詩の多くは、単純かつ平易な語彙で構成されており、ジャック・レダはこれを「死の絶対的な非現実性」*6を取り除くためだと指摘している。ただし、タルデューにとって「論理的な結びつきを持たない語を結びつけたり、滑稽な言葉の繋がりや響きを聞いたりすること」は、何よりもまず「喜ばしい」ものであったことを忘れてはならない。実際、タルデューは若い頃から、「言葉の『中身』と呼ばれるものよりもむしろ、言葉の具体的な身体（音色、判読可能な記号）と遊んで」いたと回想している（強調引用者）。

こうした実践は「ありきたりな語彙を、夢幻状態の力でもって、あらゆる意味作用が失われる地点へと向かわせる」ものであった*7が、彼の詩に意味がないわけではない。この詩人によれば、言葉は、ある「ささやき」を作り出すが、それは「謎めいて、不安に満ちており、例えその国の言語を知らずとも、声の抑揚によって感情のレベルで訴えかけてくるものがある」。彼はそれを「意味の此岸」（En deçà du Sens）と呼んだ*8。しかし、別のところで「言葉には用心しないとイケない。言葉は美しすぎて、光り輝いていて、そのリズムは、あるささやきを一つの思想と勘違いさせて、あなた方を魅了する。気性の荒い駿馬が暴走しないためにも絶えず馬銜を引っ張らないとイケない。」とも言っており、言葉の物質的な側面のみを美的に感受することへ警鐘を鳴らす*9。

こうした誘惑的な「意味の此岸」に対置されるのが、「意味の彼岸」（Au delà du Sens）である。それは、「ぼんやりとして、不確かで、あやふやにしか見えない」、「言語の無限の可能性である」、「《 ineffable 》（筆舌に尽くしがたい＝滑稽で何とも言えない）なものである。だが、この無限の世界に身を置くことは、ほとんど理解不可能な超越を受け入れることになる。そのため、タルデューの実践は、この此岸と彼岸の二つの意味の間で、言わんとすることと言われたことの合致を目指すものになる。そこで現れる「意味」とは、通常の意味で用いられる意味作用でも、意味内容でもない。あるいは、意味を完全に放棄し、無意味を志向する「ナンセンス」でもない。それは、通常の意味に抗する形で「意味」を捉えんとする「アンチセンス」（Anti-sens）と呼ばれるものになる*10。



ジャン・タルデューと母カロリーヌ（カリーヌ）

参考文献

- Jean Onimus, *Jean Tardieu : un rire inquiet*, Champ Vallon, 1985.
- Jacques Réda, « L'autre côté », *La Sape* n° 32, 1993.
- Robert Sabatier, *Histoire de la poésie française du XX^{ème} siècle*, t. III, Albin Michel, 1988.
- Jean Tardieu, *Œuvres*, Gallimard, 2003.

主要著作

レジューム最終頁に記載

*5. Jean Onimus, *Jean Tardieu : un rire inquiet*, Champ Vallon, 1985, p. 8.

*6. Jacques Réda, « L'autre côté », *La Sape* n° 32, 1993, p. 22.

*7. Jean Tardieu, *Œuvres*, Gallimard, 2003, p. 1006. [abrégé ci-dessous en TO]

*8. TO, p. 983.

*9. TO, p. 944.

*10. TO, p. 983.

Diurne - *Comme ceci comme cela* (Gallimard, 1979)

Diurne

Est-ce que tu dors ?

Est-ce que t'éveilleras un jour ?

Ni veille ni rêve : cela est.

Des enfants jouent

Un éclat sur une vitre

Un ronflement d'avion

Le sol résonne Je marche à grands pas

Fraîcheur sur les yeux

Je tiens J'éprouve Je sais à qui parler

Tout répond

Foisonnement.

(Oublie ! N'oublie pas ! Oublie ! N'oublie pas !)

Un coup de frein

Un nuage passe

et tout change de couleur.

Surprise sans fin

Horizons qui n'en finissent pas de se déplier

Il y a toujours quelque chose plus loin.

Ce qui murmure hors de moi en moi-même

et comparable au fleuve

qui traverse tout sans se mélanger à rien

Ma vie, je t'ai cherchée toute ma vie

tu as pris les plus beaux visages

mais je n'entends que la voix.

Au bord de quelle nuit te trouverai-je enfin ?

(TO, p. 1239)

昼行性のもの

君は寝てるのかい？

いつか起きるのかい？

寝覚めず夢見ず。そういうこと。

子供たちが遊んでいる

硝子窓のきらめき *11

飛行機の轟音

地表が反響する 僕は太股で歩く

瞼の上がひんやりと

僕は言い立てる 僕は思う 僕は誰に話しているか知っている

万物が応答する

ひしめき。

(忘れろ！忘れるな！忘れろ！忘れるな！)

急ブレーキ

くもが走り

すべてが色を変える *12

永遠の思いがけぬもの

広がり続ける地平線

いつも先を行く何かがある。

僕自身の中で僕を越えてささやくもの

似ているのは河だ

何物とも一切混じり合うことなく流れている

僕の人生よ、君を見つけるのに僕は全人生を費やしたよ

君はこの上なく美しい表情を持っていた

けれど僕には声しか聞こえない。

どんな夜を前にして、とうとう僕は君を見つけるのだろうか？

*11. 突発的な轟音という意味もある

*12. 「表情が曇り、顔色が変わる」という見方も可能。

Nocturne - *Comme ceci comme cela*

Nocturne

Ici s'ouvre un monde nouveau
démasqué par la fin du jour
Le temps bascule J'écoute Je retiens mon souffle.

Une réponse dernière
Un pâle éclat
Un secret promis et tenu

Les mots
un essaim d'astres
Une plume une feuille

La nuit s'éclaire au centre
Au centre est la source de toute couleur
Au centre est l'avenir longtemps mûri sous les cendres

Au centre est mon amour pour ce monde
Ma joie mon espérance invincible et trahie.

*J'irai mourir dans mon enfer
Je déchirerai les vestiges de la misère
Je délivrerai ce qui est immobile
Je perdrai mes enfants dans la clarté
Je forcerai les secrets de la douleur
J'écarterai les rideaux du théâtre de la mort.*

Oubli
Mémoire
soupir

Roule miracle torrent puissance
que l'aube arrive reparte revienne
que fuient les tourbillons

Le silence est un tonnerre lointain

Toute défaite est mon triomphe

夜想曲

ここで始まる新世界
夕闇によって暴かれる
時が変わる 僕は耳を傾ける 僕は呼吸を押し殺す。

最後の応答一つ
一筋の青白い閃光
約束し守られたある秘密

言葉たち
星々の群れ
一枚の羽 一枚の紙葉

夜が真ん中で照らされる
真ん中には全ての色の源がある
真ん中には長い時間をかけ灰の下で作られた未来がある *13

真ん中にはこの世界への僕の愛がある
不屈だが裏切られた僕の喜び 僕の希望

僕は自分の地獄の中で死んでいこう
僕は悲劇の残存者たちを引き裂くだろう
僕は不動のものを解きはなつだろう
僕は明るい光の中で自分の子供たちを失うだろう
僕は痛みの秘密を押し付けるだろう
僕は死の舞台のカーテンを開くだろう

忘却
思い出
溜め息

途轍もない奇跡の急流が走る *14
夜明けよ来い また出て行け また戻って来い
めくるめく動きよ流れ去れ

沈黙は遙か彼方の雷鳴だ

あらゆる敗北は僕の勝利だ
(TO, p. 1240)

*13. Un feu qui couve sous la cendre で「機が熟すのを待つ」。

*14. 全て無冠詞名詞で読めば「ローラー 奇跡 急流 力」

Oradour - *Les Dieux étouffés* (Seghers, 1946)

Oradour

Oradour n'a plus de femmes
Oradour n'a plus un homme
Oradour n'a plus de feuilles
Oradour n'a plus de pierres
Oradour n'a plus d'église
Oradour n'a plus d'enfants

plus de fumée plus de rires
plus de toits plus de greniers
plus de meules plus d'amour
plus de vin plus de chansons.

Oradour j'ai peur d'entendre
Oradour je n'ose pas
approcher de tes blessures
de ton sang de tes ruines,
je ne peux, je ne peux pas
voir ni entendre ton nom.

Oradour je crie et hurle
chaque fois qu'un cœur éclate
sous les coups des assassins
une tête épouvantée
deux yeux larges deux yeux rouges
deux yeux graves deux yeux grands
comme la nuit la folie
deux yeux de petit enfant :
ils ne me quitteront pas.
Oradour je n'ose plus
lire ou prononcer ton nom.

Oradour honte des hommes
Oradour honte éternelle
haine et honte pour toujours.

Oradour n'a plus de forme
Oradour femmes ni hommes
Oradour n'a plus d'enfants

オラドゥール

オラドゥールにはもう女がない
オラドゥールにはもう男がない
オラドゥールにはもう木の葉がない
オラドゥールにはもう石がない
オラドゥールにはもう教会がない
オラドゥールにはもう子供がない

もう煙もない もう笑いもない
もう屋根もない もう屋根裏部屋もない
もう積み藁もない もう愛もない
もうワインもない もう歌もない

オラドゥール 僕は聞くのが怖い
オラドゥール 僕には君の傷に
近付く勇気がない
君の血 君の残骸にも、
できない、できないんだ
君の名を見ることも聞くことも

オラドゥール 僕は叫び咆吼する
人殺したちの掃射の下で
心臓が破裂するたび
怯えた頭が
二つの大きな目 二つの赤色した目
二つの厳かな目 二つの見開いた目
それはまるで夜 狂気
幼子の二つの目。
その目が僕から離れない。
オラドゥール 僕にはもう君の名前を
読んだり発音したりする勇気がない

オラドゥール 人間の恥辱
オラドゥール 永遠の恥辱
永遠の憎しみと恥辱。

オラドゥールにはもう形がない
オラドゥール 女も男も
オラドゥールにはもう子供がない

Oradour n'a plus de feuilles
Oradour n'a plus d'église
plus de fumées plus de filles
plus de soirs ni de matins
plus de pleurs ni de chansons.

Oradour n'est plus qu'un cri
et c'est bien la pire offense
au village qui vivait
et c'est bien la pire honte
que de n'être plus qu'un cri,
nom de la haine des hommes
nom de la honte des hommes
qu'à travers toutes nos terres
on écoute en frissonnant,
une bouche sans personne
qui hurle pour tous les temps.
(TO, pp. 245-246)

オラドゥールにはもう木の葉がない
オラドゥールにはもう教会がない
もう煙もない もう少女もいない
もう夜もなく朝もない
涙もなく歌もない

オラドゥールはもはや叫びでしかない
そしてそれはまさに最悪の侮辱
生きていた村に対する
そしてまさに最悪の恥辱
もはや叫びでしかない、
人間の憎しみの名
人間の恥辱の名
我らが大地に行き渡る
いかなる時にも咆吼する
人なき口を
震えながら聴いている。

主要作品

- *Le fleuve caché*, La Pléiade, 1933.
- *Accents*, Gallimard, 1939.
- *Le témoin invisible*, Gallimard, 1943.
- *Figures*, Gallimard, 1944.
- *Les dieux étouffés*, Seghers, 1946.
- *Monsieur Monsieur*, Gallimard, 1951.
- *Un mot pour un atre*, Gallimard, 1951.
- *La première personne du singulier*, Gallimard, 1952.
- *Une voix sans personne*, Gallimard, 1954.
- *Théâtre de chambre*, Gallimard, 1955.
- *Poèmes à jouer*, Gallimard, 1960.
- *Histoires obscures*, Gallimard, 1961.
- *Pages d'écriture*, Gallimard, 1967.
- *La part de l'ombre*, Gallimard, 1972.
- *Le professeur fræppel*, Gallimard, 1978.
- *Comme ceci comme cela*, Gallimard, 1979.
- *La cité sans sommeil*, Gallimard, 1984.
- *Le miroir ébloui*, Gallimard, 1993.